

日本アンダーライティング協会 第74回教育講習会

コロナ後遺症と保険への影響解説

日本アンダーライティング協会は12月8日、第74回教育講習会をオンラインで開催した。ハノーバー再保険グループメディカルオフィサー兼ライフ・リスク・アクセスメント部門ゼネラルマネージャーのカプリエル・タイヒマン氏 (Dr. Gabriele Teichmann) が、Long COVID (後遺症) と生命保険への影響をテーマに、これまでの経過、死亡率・罹患率の考察、生命保険への影響と今後の見通しについて解説した。当日のライブ配信とアーカイブ配信で合計126人(2020年12月22日時点)が視聴した。

タイヒマン氏は、症状がみられること、死亡率・罹患率の考察

これまでの経過として、また、多臓器障害によりさまざまな持続的症狀が現れる可能性がある。Long COVIDの症状は変異株により異なり、200項目以上の症状が該当することがある

各国の死亡率・罹患率調査から考察

初期から継続する場合と、回復後から開始する場合があり、時間の経過とともに現れたり消えたり、または再発することがあり、女性に多く、他の診断名では説明できない

死亡率・罹患率の考察になることを示した。エスニアの長期死亡率調査では、感染から35日までの重篤・重症・非重症者それぞれの死亡率に大幅な違いがあることや、60歳以上では感染から85日以降の死亡率が非



講演するタイヒマン氏

性的疾患や持続的後遺症が、各国のさまざまな調査からはLong COVIDの影響が発生する患者は2〜80%にわたるとい見解も発表されていることを説明した。生命保険への影響と今後の見通しでは、「Long COVIDは不明点はまだ多く、症状の悪化や長期持続するリスクに対してアンダーライティングがどこまで対応できるかという局面に立っており、また、これから蓄積されていくさまざまな情報や科学的進展に応じて、リスク要素の考慮や料率の見直し、引受基準の見直しを行っていく必要がある」との考えを示した。タイヒマン氏は最後のまとめで、Long COVIDの死亡率は増加し、時間の経過とともに横ばいになる傾向があるが、現在の調査期間の12カ月間を超えた場合の影響も今後注視していく必要があるとし、「今後の展望として私たちはCOVID-19とともに生きるといことを受け入れなくてはならない」と語った。(文責:大同生命契約審査課<東京>寺前皓子)

COVID-19の長期的な神経学的転帰のリスク調査では、非感染者と比較した場合、感染者は入院がな

は急性期COVID-19と心血管障害のリスク増加との関連性を調査し、一般的には心血管障害リスクは感染後すぐに正常レベルに戻ることが分かったが、感染後から少なくとも12週間は新規の糖尿病の発症リスクが上昇し、その後低下したというデータがあることを示した。チャプターの最後では、Long COVIDで影響を受ける範囲は、単一の疾患に限られないこと、WHOの発表では10〜20%の患者で慢